



前世管理人01



蜜座印師

曇天ばかりが影を追う帰路だなど、自分の陰鬱な人生を呪った。仕事帰りだというのに、どうだ人々のこの活気は。どうせロクに働いてないんだろう、俺たち派遣に仕事をやらせて、お前らは呑気にスマホをいじっている、だからこそ、この曇天に対する嫌みであるかのような、俺の帰路を汚す活気なのだ。

最初の一步が間違っていた。いやその準備段階。希望という麻薬、その毒性について解く大人も確かにいたが、国際経済学の信徒でしかなかった若き俺が、夢と希望に満ち満ちて、外資系企業に就職したことを、いったい誰が咎めることができるだろうか。

実力とは取引額のみであるとは夢にも思わなかったし、先輩社員に営業成績を譲渡しなければ、出世の道が閉ざされるということも想像だにしなかった。

実力主義という一見平等なシステムが、これほど理不尽なものであったとは。年末の派遣村で、残飯を食らう生活になるまでは全く知ることはなかったのである。

希望という幻想に踊らされていた、そうだとしても納得がいかない。仮に俺の人生設計の甘さをどれだけ非難したとしても、それ以上に甘く、その場の快樂と無謀な展望に身を委ね、少しの幸運に支えられた人間と、俺とを別つ境界線が決して見当たらないのだ。

俺と俺以外とを別つ境界線。そこに一切の合理性がないのならば、それはきっと不合理なものであり、どこかで不条理な歯車が俺の人生に紛れ込んでいるに違いないのだ。汚れた雑踏の足を、その歯車を探すかのような憎悪の姿勢で歩き、俺は背後に近づく別の歯車の回転音には全く気がつかないでいた。

「落としましたよ」

それは男だった。小麦色の健康的な肌を、子供の遊びだと言わんばかりに焼き続けたような真っ黒な顔。一目で仕立て物だとわかる張りのある黒のスーツ。シャツもネクタイも、全身黒づくめの男。

「落としましたよ」一度目と同じ親切さで、男は財布を差し出している。

「私ですか？」

「ええ。確かにあなたですが」

見覚えの無い革財布。何よりその財布の膨らみこそが人違いである証拠なのだが、同時にだからこそ、このまま手にするべき革財布でもあった。

「ありがとうございます」できるだけ自然に、俺は財布を受け取り軽く会釈をする。

「いえいえ。一度手にした幸福を手放す事は是非とも避けたいところですからね」

やけに大袈裟に話す男だなど思いながらも一度軽く会釈をした。その一瞬、視線を男から外したせいで、男はまるで霧のように雑踏に紛れて消えてしまった。

俺はとにかく急ぎ足で公衆トイレへと向かった。罪悪感や雑踏の空気を刃物のように尖らせている。まるで血だるまになりながら、公衆トイレの個室に駆け込んだ。

弾む鼓動を押さえながら、俺は財布の中身を確認してみる。「百万だ」帯を外して雑に数え直してみる。数える事が快樂となり、もはやそれが百万あるのかは問題ではなかった。

運転免許証には八幡久弥とある。俺の名前は木村正和だ。派遣暮らしの負け組であり、毎日自動車部品工場、オイルバンパーを組み立てている。仕事を覚えて作業効率を上げると部品供給が間に合わず「嫌みか」と罵倒され、作業効率を下げると「でき損ないが」と罵られる。派遣として働くためには、人間らしさを一切捨て、可もなく不可もないベルトコンベアの一部になるしかない。

そんな機械のような、油がこびりついた俺の指先が、不条理な幸運を手に入れている。百万は確かに大金だが、決して今すぐ仕事を辞めて遊んで暮らせるようなものではない。だがそんなことは問題ではなかった。この俺が幸運を手に入れているという事実が、まるで人間に与えられた最低限の尊厳を、今初めて手にいれたかのような、まるで母の胸に抱かれながら生命の誕生を祝福されているような、神聖な歓喜に俺は包まれていた。

財布にはクレジットカードも入っているが、これは流石に使えない。他には何が入っているのか、卑しくも中身を探索していると、一枚の名刺を発見した。この財布の持ち主のものだ。

俺は確かに幸運を手に入れた。それは俺の人生にいつのまにか組み込まれた不条理な歯車が、新しい歯車に交換されたかのような衝撃的な出来事である。だがその新しい歯車が、決して合理的なものではなく、新たな不条理の歯車でしかない、そう思わせるには十分な、それは硬質な名刺だった。

『前世管理人 八幡久弥

電話一本であなたの人生書き換えます 二十四時間いつでもコールOK

お電話ください ☎080*****』

不条理な人生に慣れているとはいえ、それはあまりにも枠外の、あからさまに怪しげなものであると、十分にそして冷静に認識することも可能だったのだが、そうするとこの手の中の百万という存在や幸運さえ否定してしまう、そんな得たいの知れない恐怖によって、俺はただその名刺をポケットに大事にしまって、公衆トイレから駆け出すしかなかったのである。

*

「もしもし」

それはあっけなく繋がったし、俺は躊躇なく電話をかけている。

「もしもし、木村さんですね」

一瞬凍りつく。そして、なるほどこれは会社の誰かによる悪質ないたずらなのだと理解した。見知らぬ男に見知らぬ財布を渡された俺が、どれほどの人間らしさを発揮するのか、それを雑踏に紛れて眺めていたに違いない。俺は奴等の期待通りに、醜く浅ましく、大金を手にしただけでは物足りず、怪しげな電話を躊躇せずかけているのだ。

さぞ満足げに、腹を抱えて笑っているのだろう。俺はこの殺意にも似た怒りの正当性を得るために、もう少しこのまま騙されてみようと考えた。

「はい、確かに私は木村ですが、何故それを」

「それは財布をあなたに届けさせたのが私だからですよ」

あっさり、落とし主がこの計画の関係者だと認めたことに、少しの違和感があったのだが、俺はこのまま、奴等が俺をどうしたいのかを探ってみることにした。

「もちろんそのお金もあなたのもんです。それは私からのお詫びのしるしなんです」

「お詫びとはどういう意味なのかわかりません」

どこまで茶番を続けるつもりなのか。次第に怒りが好奇心に侵食される気配。

「実はあなたに割り当てられた前世が、他人のものだと判明したのです」

「では私の本当の前世は、誰のものになっているのです？」

男は「野村祐介さんです」と、俺の小学校時代の同級生の名前を告げた。一体どうやって調べたのか。そこまでして俺を騙そうとする理由はなんなのか。思い当たるフシはないが、このまま話を進めてみたいと思った。

「それで、どうすれば本当の前世が手にはいるのですか？」

「はい。あなたと野村さんが当時よく遊んでいた神社がありますね？その裏手に小さな石碑があります。あなたがそこに登って、野村くんがいたずら心であなたを押ししたところ、落下して左膝を怪我した場所です」

不条理の歯車が急速に回り始めた。

「そこを是非訪れてください。あのときに、どうも前世が入れ替わったようなのです」

それは二人だけの秘密だった。俺も野村も、絶対にその日のことを誰にも話していないという確信がある。

「あなたは今、野村くんが本来受けるはずの前世の影響を受けています。是非本来の人生を取り戻してください」

俺は青ざめた顔で電話を切った。これは同僚のいたずらのレベルを越えている。この八幡という男の話は本当なのだろう。実際野村との思い出部分は事実だ。疑いの余地はない。あの神社に行けば、本来の俺の人生を取り戻せるのだ。

もう一度外資系企業に再就職だ。今度はどんな手段を使ってでも這い上がってみせる。俺は締め切ったカーテンを初めて解放し、外の空気を取り込んでみた。部屋のカビや埃が光輝いて見える。曇天などもはやどこにもない。どこにもないのだ。

*

神社の裏手の小さな石碑。俺はその石碑を動かした。大きめのスコップは持ってきた。新しい人生が待っている。急いで掘り起こさなくてはならない。

すぐに青いシートが出てきた。俺は急いでそのシートをどけた。

「久しぶりだな、野村」

俺の呼び掛けに気づいた野村がぱちりと目を開けた。

「いてて。よう木村、ちょっと手を貸してくれないか。十年以上寝てるとどうにも」
強張った筋肉をゆっくりとほぐしながら、野村は地面の穴に座っている。

「野村、ごめんな」

「気にするなよ、あれは事故さ」

あの日。野村に押されて石碑から落ちた俺は、激昂して野村を突き飛ばした。

「殺すつもりはなかったんだ」

「知ってるさ。友達じゃないか」

野村はゆっくりと立ち上がり、うんと背伸びをした。

「仕事はどうだい？」

「派遣さ」

「そうか、毎日正社員になれるチャンスに満ち満ちているってことか」

野村は穴から出て、俺の持ってきたスコップを手にする。俺はその穴に入り横になる。

「家族とは仲良くしてるかい？」

「いや、早くちゃんとした仕事につけと五月蠅いばかりさ」

「誰よりもお前の可能性を信じてるんだな。羨ましいよ」

野村はおどけた顔で続ける。

「俺の家族も、俺の生存を信じて搜索し続けてくれればなあ」

どしゃ、土が俺の胸元に向けられた。

「野村、俺の人生、というかお前の人生か、まあどっちでもいいが、つまらん人生だぞ」

どしゃ、どしゃ、どしゃ、どしゃ。

「それを決めるのは前世や人生、ましてや家族や社会じゃない、俺だろ？」

どしゃ。

「最高のオイルバンパー、作ってくるよ」

完全な闇の中で歯車が止まった。なんて合理的な、美しい静寂。

終